

## 過信と溺死

「やまなし随想」 121209

中央本線が甲府まで開通した明治36年ごろまで、

甲州国くになか中から東京に行くとい

えば、笹子・小仏峠を越える甲州街道か、籠坂峠から御殿場経由の鎌倉往還、そしてもう一つ富士川を駿河の岩淵まで舟で下って、そこからすでに全通していた東海道線に乗って東京へという三つのコースがありました。それらの中で第三のコースが体力を最も節約できたので多くの人がこのコースを辿ったようです。体力を酷使されないのは良いのですが、富士川は何ととっても日本三大急流の一つ。舟はしばしば巨岩に激突転覆して悲惨な事故を招くことしばしば。文字通り命がけの旅行だったわけ

です。そんな富士川舟運の事故に関する話が、石橋湛山著『湛山回想』（岩波文庫）にあります。舟運事故でしばしば犠牲になるのは泳ぎが不得手で体力の無い婦女子だったであろうと想像しませんがさにあらず。反対に屈強にして泳ぎに自信の若者などがしばしば犠牲になっ

たというのです。

富士川は水量も少なく川幅も狭いので、泳ぎに自信のある若者は、転覆した舟をしり目に自力で泳いで岸に上がろうとする。しかし、そこは名にしおう三大急流の一つ。川底は巨石がごろごろ、淵は渦を巻き、川岸はせり立つ万丈の岩壁。これらに翻弄されて、屈強な若者といえどもやがて体力を消耗して溺れる。

片や泳ぎに自信の無い者たちは、ひたすら破損した舟に群がってしがみついていた。そしてそのしがみついた舟が、彼らを岩に打ち付けたり、波に巻き込んだりすることから救ってくれたのでした。

突如出来した年末総選挙。不況や外交問題に揺すぶられ、消費税・TPP・原発の是非と、風雲急を告げる内憂外患に、政権政党から野党まで激浪に揺れた年末でした。文字通り日本三大急流富士川下りの木端舟のような揺れ方でした。そんな中で、泳ぎに自信のいくたりかの政治家は、ボロ舟を見限って時代の激流に飛び込んでいったようでした。が、彼らは今いずこ。はたして政治生命を落とすはしなかつたでしょうか。

( 1 2 字 × 7 0 行 )